



Title	现代汉语偏正复句成对关联词语隐现情况研究
Author(s)	李, 丹芸
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/96174">https://hdl.handle.net/11094/96174</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

	氏 名 ( 李 丹芸 )
論文題名	現代汉语偏正复句成对关联词语隐现情况研究 (現代中国語の主従関係の複文における対（つい）の関連語句の有無に関する研究)
論文内容の要旨	
<p>複文は二つあるいは二つ以上の節を含む文であり、複文の節は相対的独立と相互依存の特徴を持っている。関連語句は中国語の複文の教育と研究において、常に重要な役割を果たしている。一方では、既存の複文の教育では、複文と関連語句に関する学習項目を導入する際、共起するペアの関連語句を提示する形で扱われる。一方、関連語句は複文の研究においても焦点となることが多い。</p> <p>しかし、言語学的事実と中国語の意合法の観点から見ると、複文では関連語句を使わない方が一般的である。中国語の複文は関連語句を使わなくても作れることが、複文研究の初期から往々にして指摘され、理論的研究成果が蓄積されてきたが、個別具体的な観点から詳細な議論は1980年代から始まったことである。一方、教育分野の研究では、『汉语水平等级标准与语法等级大纲』（1996）（筆者訳：『中国語能力レベル基準・文法等級要綱』（1996））と『HSK考试大纲』（修订版，2015）（筆者訳：『HSK試験要綱』（改訂，2015））はこれまで中国語文法教育の基準とされてきたが、近年新たに『国際中国語教育中国語レベル等級基準』（以下、『等級基準（2021）』と略称される）が定められ、従来扱われてこなかった関連語句が無い複文の項目が『等級基準（2021）』付録A（規範）文法レベルガイドラインで新たに加わった。この変更は、関連語句が無い複文が教育現場でも徐々に注目されるようになってきたことの表れと言える。</p> <p>本研究では、複文の二分体系に基づき、大河内康憲（1967）と胡裕樹（1962）の研究を踏まえながら、新たな知見を探る。研究対象としては、因果複文、転折複文、仮定複文、譲歩複文の四種類である。本研究は四種類の関連語句が無い複文から分析し、形式特徴について“三个平面理论”（「三つの次元」理論）と認知言語学の観点から考察を行った。本研究は関連語句が無い複文の理論体系についてより深い知識を持ち、中国語の複文教育に微力ながら貢献することを期待している。</p> <p>本論文は全6章から構成されており、各章の概要は以下の通りである。</p> <p>第1章では、問題提起、研究対象、コーパスの選定と研究方法、本稿で参考する主な研究理論、論文の構成、本論文で使用される用語の一部を明らかにすることを示す。</p> <p>第2章では、複文と複文における関連語句に関する代表的な先行研究を概観する。第1節では、主に中国語の複文の分類体系を紹介し、複文の教育を問題意識の出発点とし、教育現場で主流である二分体系を選ぶ本研究の立場を示す。第2節は複文における関連語句に関する研究である。第3節は複文研究におけるいくつかの概念グループを整理する。</p> <p>第3章では、「接続詞＋接続詞」を典型的な関連語句とする複文における関連語句の有無に関する研究である。因果複文と転折複文の2つの節を対象として、テキスト『チャイニーズ・プライマー』における複文の関連語句の有無を統計し、関連語句が無い因果複文と関連語句が無い転折複文の形式的特徴を論じる。</p> <p>因果複文には、主に関連語句が無い種類の形が存在し、本稿ではこの形を“指令性因果句”と名付ける。“指令性因果句”では、前節がある事柄についての知識に基づく話し手の判断や評価であり、後節が話し手の指示的発話行為（提案、招待、提議、要求、命令など）である。“指令性因果句”では、因果複文における「已然表現」とは異なり、話し手は行動の発生を明示的に予見することはできず、一般に関連語句使用されない。指示語気が強まると、その行動が起こる可能性に対する話し手の認識が高まり、関連語句の使用の許容度が高まることで語調を強めることができる。</p> <p>関連語句が無い転折複文では、一般に次のような形式的特徴を含む：①前節と後節の文の構造が対称的で、相対の意味を持つ②前節と後節の文が明確な対照の意味を持つ③文中に「予想とのずれ」を表す言語形式がある。典型的なのは、“才”、“就”、“都……了”など予想された時間からのずれを示す副詞や構文を持つ。次に、“也”、“还是/还”など後節で類似の意味を表す副詞を持つ。また、“其实”、“倒/倒是”など後節で転折の意味を表す語気副詞を持つ。</p> <p>第4章では、「接続詞＋副詞」を典型的な関連語句とする複文における関連語句の有無に関する研究である。第4章には、仮定複文と譲歩複文の2つの節が含まれる。同様に、テキスト『チャイニーズ・プライマー』における複文の関連語句の有無を統計し、関連語句が無い仮定複文と関連語句が無い譲歩複文の形式的特徴を論じる。</p> <p>仮定複文は一般的に「非現実性」という特徴を持つ。つまり、話し手は命題が現実世界で起こる可能性があること、あるいは存在する可能性があることを表す。初中級レベルの中国語の文法点で典型的な非現実の形は、“再”、能願動詞（助動詞）など「非現実性」特徴を持つ語彙である。次に、疑問代名詞の呼応表現、否定副詞“不”の呼応表現など「非現実性」特徴を持つ構文である。また、命令文、願望文などの発話機能を持つ文である。</p> <p>譲歩複文は筆者が発見した関連語句が無い形が極めて少なく、ことわざでの使用例をいくつか見るだけである。筆者は先行研究を読み解く中で、譲歩複文と無条件複文の関連性について論じている。本研究では、論理関係の観点か</p>	

ら、譲歩複文と無条件複文には共通点があることを論じる。現代中国語では、譲歩複文も無条件複文も、主節が従節の影響を受けないという事実が強調されていることが特徴である。その違いは、譲歩複文では従節は1つの場合のみを表すのに対し、無条件複文では従節はさまざまな場合を表す。日本語の「逆接条件節」は、単一の状況を表す場合と複数の状況を表す場合がある。実際の中国語教育、特に在日中国語教育では、教師は説明や復習の際に、この2種類の複文を一緒に比較することを考え、従節が単一条件と複数条件の場合に、関連語句を使い分ける必要性を生徒に喚起することがある。

第5章では、中国語教育における複文の教育方法についての議論である。現在の複文の教育方法を踏まえて、中国語における関連語句の対（つい）の形という特徴を論じ、先行研究に基づいて関連語句がある複文と関連語句が無い複文の教育方法を提案する。言語学的な事実から見ると、中国語の複文は主に関連語句が無い形であり、関連語句が使われる場合は、単独でもペアで使われる場合は相対的に少ない。しかし、中国語における複文の教育では、関連語句が常に主な教育内容であり、両者は一見矛盾しているように見える。実際、ペアで使う関連語句も中国語の特徴であり、関連語句が無い複文の形よりも初級レベルの中国語教育に適している。しかし、合理的だからといってむやみに使うことができるという意味ではなく、既存の教育パターンを改善し、テキストで複文の形式構造を標準化し、関連語句が無い複文への関心を高める必要もある。作文トレーニングでは、徐々に関連語句が無い複文の説明を導入し、学習者が模倣するように導くことで、学習者が中級、上級へと学習を進める道を開くことが出来ると考えている。

第6章では、本研究の考察をまとめた上で、今後の課題について述べる。今後は、以下のような分野での研究を継続する。第一に、在日中国語教育におけるテキストをさらに研究し、日本人学習者の複文学習に役立つ向上が期待される。第二に、本稿で研究した四種類の複文関係以外にも、現代中国語には他の論理関係でも関連語句が無い複文があり、これらの複文の形式的特徴も筆者が今後引き続き注目する研究テーマである。第三に、古代中国語は主に意合であったが、現代中国語は言語接触において西洋言語の影響を受け、関連語句の使用が徐々に増加している。今後、複文における関連語句の通時的な発展過程の研究を継続する。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 李 丹 芸 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	古川 裕
	副 査	准教授	鈴木慎吾
	副 査	准教授	中田聡美
	副 査	教 授	林 初梅

## 論文審査の結果の要旨

《現代汉语偏正复句成对关联词语隐现情况研究》（『現代中国語の主従関係の複文における対（つい）の関連語句の有無に関する研究』）と題する本論文は、現代中国語において複文が成立する時に、接続詞や接続副詞などの関連語句がいつ出現し、いつ出現しないかを問題意識の出発点とし、特に関連語句が出現しない複文に焦点を当てて形式と意味の特徴に基づく分析を行い、その分析結果を日本語母語話者に対する中国語教育に活かすための検討と提言を行った論文である。

本論文は以下の六章から成る。

第一章では問題提起、研究対象、研究理論、使用するコーパス、そして論文の構成を述べている。

第二章では、複文及び複文で使用される関連語句に関する先行研究を概観し、本研究が複文の分類では二分体系に依り、第三章と第四章で四種類の複文を扱う理由を述べている。

第三章では、関連語句の組み合わせが「接続詞＋接続詞」となるタイプの複文を考察している。第一節では因果関係の複文を研究対象とし、第二節では転折関係の複文を研究対象として、それぞれの複文における関連語句の有無を調査し、関連語句が無い場合の形式的特徴を論じている。

ここで「行為指示型因果複文」と名付けうる意味関係を持つ因果複文では一般的に関連語句が使用されないこと、しかし、行為指示の語気が強まることによって行動の実現可能性について話し手の認識が高まり、関連語句の使用の許容度が高まるという興味深い指摘を行っている点は注目に値する。

また、関連語句を使わない転折関係の複文には、前節と後節の構造が対照的であり、意味の上でも対照性が認められること、また文内に予想とのずれを示唆する副詞“也／还／还是／倒／倒是”や“其实”などを含むことを指摘しており、説得力がある。

第四章では、関連語句の組み合わせが「接続詞＋副詞」となる二つのタイプの複文を考察している。第一節では、仮定関係の複文を研究対象とし、第二節では譲歩関係の複文を対象として、それぞれの複文における関連語句の有無を調査し、関連語句が無い場合の形式的特徴を論じている。

仮定関係の複文は、文字通り「仮定」とは「非現実性」であることから、副詞“再”や“不”、助動詞、未定を表す疑問詞の呼応表現など「非現実性」に関わる語句が関与することを指摘している。また、命令表現や願望表現なども非現実性と関係することから、このタイプの複文に馴染むことを述べている。

しかし、譲歩関係の複文では関連語句を使わない例が希少で、諺などの定型句に限られることを指摘している。それは、この意味関係の複文では主節が従節の影響を受けないことに依るとし、無条件複文との異同を述べている点は興味深い。

第五章では、日本語母語話者を対象とする中国語教育について、教育現場においても関連語句を使わない複文を教育内容のひとつとして扱うべきであると提案している。

第六章は、本研究の考察をまとめたうえで、複数の教材を調査すること、上述の四種類の関係以外の複文についても研究の範囲を広げること、そして通時的な角度及び言語接触の視野から複文における関連語句の使用を考察することを今後の課題として挙げている。

以上のように、本論文は関連語句の使用を前提として教え学ばれてきた現代中国語の複文について、関連語句を使用しない場合に着目して、理論と実践への応用を提言した好論文である。参考文献の取り扱いに修正の必要があることや今後の研究に残された部分も多いが、本論文が論じた複文における関連語句の有無に関する言語現象について一定の説得力をもった分析と解釈を提示できている点は評価できる。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）学位を得るにふさわしい論文であると判断した。